

# Frankenstein における間テキスト性

野 間 由梨花

## はじめに

『フランケンシュタイン』(*Frankenstein; or, The Modern Prometheus*, 1818) は1818年、イギリスの女性作家メアリー・シェリーによって書かれた小説である。『フランケンシュタイン』は、映画などアダプテーションの効果によりそのビジュアルイメージが先行することもしばしばある。タイトルを聞けば多くの人が怪物のイメージを思い浮かべるだろう。しかし、フランケンシュタインは実際には怪物を創った青年の名前であり、怪物には名前はなく、また、物語は復讐物語的な面白さも兼ね備えているのである。さらに、物語は幾重にも重なる入れ子構造で語られる。物語は、北極探索中のロバート・ウォルトンが、姉のサヴィル夫人に送った手紙の形式で語られる。ウォルトンは北極で行き倒れたフランケンシュタインを助け、船上でフランケンシュタインはそれまでの経緯を語り始めた。フランケンシュタインは、生命の起源に迫る研究に打ち込んでいたが、ついには生命の創造に手を染めてしまう。しかし、創り上げた怪物は恐ろしい容貌だった。フランケンシュタインは、その創造物の醜さゆえ見放してしまうが、その孤独にあえぎ苦しんだ怪物に追い詰められることになるというものだ。しかしながら、今回は間テキスト性という小説技法の特質に注目し、この小説における間テキスト性を通して、フランケンシュタインと怪物の関係性とその性質を考察し、シェリーが物語を作る際に、どのように自らの経験を生かしていたかを明らかにする。本論では特に彼女の読書経験を扱い、作中に登場する作品や副題が登場人物の性格形成とどのような関係があるか、また怪物とフランケンシュタインの関係性がどのように形成されたかを明らかにし、小説『フランケンシュタイン』において間テキスト性が果たす機能を考察する。

## 1. 間テキストとは何か

本論では間テキストという方法を用いて考察をする。間テキストという言葉自体は新しいものであるが、その概念は長く浸透してきたと言える。間テキスト性は文学や文化を理解するために重要な要素であると考えられている (Allen 10)。テキストは常に先行する他のテキストに影響されていて、新しいテキストは何もないところから生まれるのではないという理解ができる (廣野 95)。しかし、その定義は広く曖昧なものであることも指摘される。これについてグラハム・アレンは、読者がそれぞれ違う文化や文学の知識を持っていれば、解釈は読者間で変化することがあると述べている (95)。それでも多くの作家が、意識的もしくは無意識的に、他のテキストを暗示しているとも考えられる。シェリーは自分自身がこの概念を意識していることを、1831年に出版した『フランケンシュタイン』第3版の前書きに以下のように記している。このことから、彼女もまた他の作品から影響を受けた作家の1人だと言えるのである。

『ドン・キホーテ』のなかのサンチョ・パンサのこぼれ話を借りるなら、何ごとにも始まりというものがなくてはならず、その始まりはそれに先立つものと結びついていなくてはならない。[……] 創作とは、従って無から生まれるものではなく、混沌から発するものであると、そこは謙虚になって認めざるを得ないのだ。まず第一に素材ありき、曖昧模糊として形のない素材に形を与えていくのであって、素材そのものを創り出すことができるわけではない。(Frankenstein 167) (1)

## 2. プロメテウスとフランケンシュタイン

はじめに、作品の副題にも使用されているプロメテウスとフランケンシュタインの関係性について考察する。フランケンシュタインとして広く知られるこの小説には、「あるいは現代のプロメテウス」という副題がついている。プロメテウスはギリシャ神話において、人間に火を与えたことがゼウスの怒りを買

い罰せられる。山に縛り付けられ、ゼウスに許されるまで鷹に肝臓を突かれるという終わりのない苦しみを与えられる。この副題から、フランケンシュタインはプロメテウスのように怪物に命を与え、最終的には罰を与えられるということが想像できる。同時に怪物の復讐は、フランケンシュタインを殺すことではなく、山に縛り付けられたプロメテウスが鷹に毎日肝臓を突かれるように、弟、使用人、親友や婚約者など、親しい人たちの死をもって苦痛を与え続けるというものである。したがって、副題にも物語に関係する重要なヒントが隠されていると言えるのである。

このようにタイトルからもテキスト同士の様々なつながりを確認することができるが、物語中で注目したいのは怪物が影響を受けたと語る3冊の本である。それらは、プルタークの『英雄伝』(Plutarch's Lives)、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』(The Sorrows of Young Werther, 1774)、ミルトンの『失樂園』(Paradise Lost, 1667)の3冊である。これらの作品は特に、登場人物の人格形成において大きな影響を果たしていると考えた。次に続く章ではゲーテとミルトンの2作品に焦点を当て、作品が与えた影響とその関係性を考察する。

### 3. 『若きウェルテルの悩み』が怪物に与えた影響

ゲーテの『若きウェルテルの悩み』に関しては、怪物の人格形成に大きく影響したと考えられる。それが強く現れていると言えるのが、物語の中で「怪物」として存在するフランケンシュタインの創造物の言葉や感受性の豊かさである。フランケンシュタインの創造物は「人間」ではなく「怪物」として生きているが、人間と同じように言葉を操り感情や考えを表現する。「怪物」という言葉でのみ創造物の存在を表現してしまえば、その醜さや野蛮さというイメージが先行しがちであるが、実際に怪物の悪の側面が剥き出しになるのは周りの環境によるものであるのだ。このような怪物の人間的な人格が形成されたことには、『若きウェルテルの悩み』との関わりがあるのではないだろうか。例えば、怪物は『若きウェルテルの悩み』についてこのように述べている。

『若きウェルテルの悩み』は、その単純にして心打つ筋立てにも興味を惹

かれたが、それに加えてさまざまな問題が論じられていて、それまでおれには曖昧でどうもよくわからなかった事柄にいろいろな光が投げかけられるようで、尽きることのない驚きと考えを深める手がかりを与えられる思いだった。[……] しかし、なんと言っても、ウェルテルその人こそ、これまでにおれが眼にした、あるいは心のなかで思い描いていたどんな人間よりも、ずっと気高い者に思えたね。ウェルテルには気付いたところがひとつもなくて、そこが心に深く染み入った。死と自殺について論じている部分を読んだ時には、驚きと疑問とで胸が張り裂けそうな気がしたほどだ。(Frankenstein 89)

怪物はプルタークの『英雄伝』からは賞賛し、愛することを学んだと語ったのに対し、『若きウェルテルの悩み』においては失意と憂鬱を学んだと言う。フランケンシュタインの死に際する怪物の言動から、怪物の『若きウェルテルの悩み』から得た失意と憂鬱の感情が読み取れる。フランケンシュタインの亡骸を前に、怪物は繰り返し自分を責め続けながらこのような言葉を投げかける。

「こいつもおれの犠牲者だ [……] こいつが死んで、おれの罪は完結した。これでこのみじめな生も、ようやく終わりにたどり着いた。ああ、フランケンシュタイン、慈悲と献身に生きた者よ。今さらおまえに赦しを請うたところで、なんになる？おれのしたことは取り返しのつかぬことだ。お前の愛する者を端から殺すことで、おまえまでをも死に追いやった。ああ、すでに冷たくなっている。もはや答えることもできないのか」(Frankenstein 158)

生を受けてすぐに見捨てられ、出会う人には怪物と罵られ、唯一信頼できるはずであったフランケンシュタインにも裏切られた怪物は復讐を決意する。しかし、その復讐の対象であったフランケンシュタインに関して怪物は「愛され、賞賛されるべき人間の中でもえり抜きの見本のようなあの男」(Frankenstein 160) と讃え、その死を悼むのである。こうした言葉や、フランケンシュタインや盲目の老人ド・ラセーが怪物の言葉には誠実さがあると行ったように、感情や言葉すら持たなかった怪物が、偶然拾った本から愛や賞賛、失意や憂鬱と

いう感情を知ったからこそ、怪物にも人間性が備わっていると言えるのだ。

このほかにも怪物の人間性を垣間見ることのできる場面がある。それは、怪物が闇の中に消えていく場面である。悲しい運命に苛まれ、復讐に手を染めた怪物が復讐を完結させるために選んだ手段は自らの死だった。これは『若きウェルテルの悩み』の中で、主人公ウェルテルが、友人の許嫁であるシャルロッテへの思いを断ち切るために死を選択する姿に重なる。ウェルテルはシャルロッテへの強い思いを日記で「この世では、私があなたを愛し、あなたを彼の腕から私の腕に奪おうとすることは、罪でしょう。罪？ よろしい。私はそれに対して自分を罰します」(Werther 128) (2) と記す。

同様に自らのおかした罪の深さを理解している怪物は、この復讐は自らの死をもって完結するとし、ウォルトンに「おれの仕事はほぼ終わった。この生涯を全うし、やるべきことをやり終えるのに、おまえはもちろん、もう誰の死も必要ではない。このおれが死ねば、それですむ。わが身を犠牲にすることを、おれがためらうと思うな。」(Frankenstein 160-61) と語りかける。怪物にとってフランケンシュタインは、怪物の体を作り上げ、命を吹き込んだ創造主であり、唯一怪物の生い立ちを知る理解者であるはずだった。つまり、怪物は生みの親であるフランケンシュタインから愛されるべき対象になるべきであったということである。しかし、怪物はフランケンシュタインからの愛情を受け取るどころか、見捨てられてしまうのである。これは、ウェルテルがシャルロッテの愛を受け取りたいと思う気持ちのように、人間性を持っていると言える感情である。

このようにウェルテルと怪物の関係性を探っていくと、怪物の人間性という点に注目できることに気づく。怪物という言葉でくくってしまえば、そのキャラクターは恐ろしいものであると捉えられてしまうかもしれない。しかし、作品の中では怪物の子供のような無邪気さや、人助けをする優しさ、学ぼうとする健気な姿勢が描かれているのだ。その醜い姿や復讐に燃える姿は、確かにその人間性を欠く要素にもなっているが、その悪魔的要素を引き出してしまったのは周りの環境における結果であると言えるのである。

『若きウェルテルの悩み』においては、怪物の人格形成と深く関わりがあると考えられた。次に考察する『失樂園』には、特にシェリーが各巻の表紙において題辞にも使用していることから、『失樂園』を物語の下敷きとして意識

していることがわかる。このことから、フランケンシュタインと怪物の、創造主と創造物という関係性が結べることも納得できる。次の章ではどのような点において、その関係性が現れているかを考察していく。

#### 4. 『失樂園』の存在

先に述べたように、シェリーは各巻のタイトルページに『失樂園』から次に記すアダムの言葉を引用している。

創造主よ、わたしを土塊から人の姿に創ってくれと  
頼んだことがあったか？わたしを暗黒から起こしてくれと  
願ったことがあったか？

『失樂園』第十巻 七四三—七四五行 (*Frankenstein* 3)

これは3巻本である小説の各巻冒頭に引用されているフレーズであるが、このことからこのような始まり方によって、アンジェラ・ライトが言及しているように、「起源・創造・責任 (origins, creation and duty)」についての疑問を投げかけていることが考えられる (36)。怪物自身も『失樂園』に関して次のように述べている。

なにしろ、全能の神が被造物と戦うのだからな、興奮しないわけがない。しかも自分の境遇とよく似た場面が眼につく。そのたびにおれはわが身に照らしあわせてみたよ。アダムと同じく、おれもこの世に存在しているいかなる者ともなんのつながりも持たない身の上だ。しかし、それ以外の点ではアダムはおれとは決定的に違う。[……] そんな立場を表すなら、むしろサタンのほうこそ似つかわしい。おれは何度もそう思った。母屋に住むおれの守り手たちの幸せそうな様子を見ているとたびたび、サタンと同じように、心のなかに嫉妬の苦汁が湧きあがってきたからだ。(Frankenstein 90-91)

彼らの関係は、創造主である神とフランケンシュタイン、神の被造物アダムとフランケンシュタインの創造物である怪物、また同時に怪物はサタンとも重ねることができる。また注目すべき点としては、『失樂園』の中での神とアダムとサタンの三角関係が描く親と子の責任、反逆心に関しても考察すべき点があるということである (Wright 36)。『フランケンシュタイン』の中で怪物は、誰からも愛を受けることがなく、共に戦う仲間もない。これは『失樂園』において、神からの寵愛を受けるアダムにも、共に戦う仲間のいるサタンにも似ていない。怪物は『失樂園』を「本当の話」(Frankenstein 90)として捉えていた。本から多くの知識を得ている怪物は、フランケンシュタインに「忘れるな、おまえがこのおれを創ったんだぞ。ならば、おれはアダムであるはずじゃないか」(Frankenstein 68)と主張した。神がアダムに愛を与え、さらに彼の願いを聞き入れていることが自分にもなされるべきことだとして、アダムに自らを重ね合わせ、そして怪物はフランケンシュタインに女の怪物を造ることを要求する。

「おれのために女を造るのだ。共に暮らし、心を通わせあえる相手を造ってくれ。生きていくのには、そういう相手がどうしても必要だ。これはお前にしかできないことだ。おれはそれを、おれの権利として要求する。拒否することは、お前にはできないはずだ」(Frankenstein 101)

フランケンシュタインはその要求を一度は受け入れるが、完成直前に怪物の目の前で女の怪物を破壊する。唯一の理解者であるべき創造主にも裏切られた怪物は、フランケンシュタインに「だが、覚えておけ。おまえの婚礼の晩に、必ず会いに行くからな」(Frankenstein 121)と言い残し、復讐を誓うのだった。かつて神に仕えたサタンも、一度神に背いたことにより追放されてしまう。サタンは神から寵愛を受けるはずだったが、神が自分に目もくれないことが不満でならなかった。人間のために作られた世界を見て、サタンは次のように述べる。

そして、今、見捨てられ  
追放された我々の代わりに、彼の読みする新しく創造れた

人間が、そしてその人間のために創造された世界が、あそこに見える！さらば、希望よ！希望とともに恐怖よ、さらばだ！  
さらば、悔恨よ！すべての善は私には失われてしまった。  
悪よ、お前がわたしの善となるのだ！（*Paradise Lost* 87）（3）

友情や愛情を求め、孤独からの脱却を望んでいた怪物は、創造主であるフランケンシュタインにも見放されてしまう。また、出会う人からは怪物と罵られ、善を施しても受け入れてもらえない。このような怪物の状況に反するように、フランケンシュタインは自らの幸せを願っていることに怪物は気づき、フランケンシュタインの婚約者であるエリザベスを、結婚式の前夜に殺してしまう。サタンの中で善が悪となり、悪が善となった瞬間があったように、怪物にもその時が訪れる。

「だが、あいつの伴侶が死んだとき [……] いや、あのときはまだ、みじめではなかった。おれは感情のすべてを振り捨て、あらゆる苦悩を押し殺し、全き絶望にわれを忘れて思うさま荒れ狂ったのだ。そのときから、おれのなかでは悪が善となった。」（*Frankenstein* 159）

こうして怪物はそうするほかなかったのだと自らの悪魔的計画を遂行していく。そして、この計画はフランケンシュタインと怪物自らの死をもって終わりを遂げる。ウォルトンはフランケンシュタインと怪物の最後の言葉を聞き、フランケンシュタインの最期と闇の中に消えて行く怪物の姿を見届ける。両者の言葉はウォルトンによって読者に伝えられることになるが、それらには後悔と安堵の気持ちが表されている。フランケンシュタインは、

「平穩のなかに幸福を求めてください。科学の研究や未知の世界を探検することで名を挙げるといのは、一見無害に思えるでしょうが、それでも大きすぎる野心はお持ちにならないほうがいい。いや、しかし、わたしはなぜ、こんなことを言っているのか……そうした希望を持ったことで、私は身を滅ぼしたけれど、ほかの人なら成功するかもしれないではないか」（*Frankenstein* 157）



と言ひ残し、怪物は「[……] 死は唯一の慰めだ。罪に穢れ、苦い悔恨に心を引き裂かれている者にとって、死以外のどこに安らぎを見出せるというのだ？」(Frankenstein 161) と嘆くのだった。

復讐を心に決めたサタンでさえも、

ああ、私のこの惨めさはなんとしたことか！どこへ逃げたらこの無限の怒り、この無限の絶望から脱することができるのか？どこへ逃げようが、そこに地獄がある！いや、私自身が地獄だ！(Paradise Lost 86)

と述べていたが、蛇に姿を変えてイヴに禁断の果実を食べるようにそそのかしたサタンは、仲間から賞賛されるどころか、祝福されることもなく、神から罰せられてしまう。また、アダムはイヴと共に樂園を追放され、神に次のように訴える。

私は自分が生まれてくることに同意をしなかったのです、ですから、主が私をもとの塵に戻されることも、全く正しく当然なことだと思っております。自分の方から求めなかったとはいえ、与えられた善きものを保ってゆくのに必要な条件があまりに苛酷で、到底それが実行できない以上、私は自分の持っている一切を今放棄し、元に戻したいのです。(Paradise Lost 262)

フランケンシュタインと怪物は、創造主と創造物の関係で結ばれていたにも関わらず、フランケンシュタインは、完成した創造物が自らの意図に反し醜いものであったということから、怪物を見捨ててしまう。怪物が自らの存在を「おれは誰だ？何者なのだ？どこから来て、どこへ向かえばいいのか？」(Frankenstein 89) と自らに問うたように、サタンやアダムも自らの存在に疑問を抱き、またそれを創造主である神に訴える。また、サタンのように復讐の完結を誰も賞賛するものがいなかったように、怪物の心情やその復讐心を理解するものは誰もいなかった。

## おわりに

本論文では、作中に登場する文学作品と登場人物の関係性、またそのキャラクターがどのように形成されたかについて考察した。この研究を通して明らかになったことは、フランケンシュタインの創造物という存在でありながら、人間と同等の心を持つ怪物のキャラクターが完成したのは、怪物が作中で偶然出会った本の存在が大きいということである。怪物は『若きウェルテルの悩み』から崇高な人物像を作り上げ、失意や憂鬱という感情を手に入れ、また、『失樂園』からは、創造主と創造物の関係が良好であるべきという構図を知ったのである。間テクスト的に『フランケンシュタイン』を読み解くことで、物語やその登場人物のあり方をより深く考察することができるのだ。

先行テキストを踏まえて新しいテキストを創造することが、この作品で実現されていることが明らかになった。フランケンシュタインが動物や人間の死体を切りはりして怪物を創造したように、先行テキストを改善・修正・編集することによって、新しいテキストが創造されているのである。つまり、間テクスト性は文学作品の創造において大きな意味があると言える。

(本稿は、日本テキスト研究学会第18回大会〔2018年8月31日、於佛教大学〕にて発表した草稿に基づくものである。)

## 注

1. *Frankenstein*からの引用は、Mary Shelley, *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*, A Norton Critical Edition, 2<sup>nd</sup> Edition. Ed., J. Paul Hunter (New York: W.W. Norton, 2012) に基づき、括弧内にページのみを記す。なお、『フランケンシュタイン』の訳文は、新潮社から刊行されている翻訳書を参考としている。
2. *The Sorrows of Young Werther* からの引用は、W. Johann Goethe, *The Sorrows of Young Werther*. Trans. Michael Hulse (London: Penguin, 1989) に基づき、

括弧内にページのみを記す。なお、『若きウェルテルの悩み』の訳文は、岩波書店から刊行されている翻訳書を参考に行している。

3. *Paradise Lost* からの引用は、John Milton, *Paradise Lost* (New York: Oxford University Press, 2008) に基づき、括弧内にページのみを記す。なお、『矢楽園』の訳文は、岩波書店から刊行されている翻訳書を参考に行している。

## 引用・参考文献

- Allen, Graham. *Intertextuality*. Trans. MORITA Takeshi. Tokyo: Kenkyusha, 2002.
- Goethe, W. Johann. *The Sorrows of Young Werther*. Trans. Michael Hulse. London: Penguin, 1989.
- Goethe, W. Johann. *The Sorrows of Young Werther*. Trans. TAKEYAMA Michio. Tokyo: Iwanami-shoten, 2015.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Trans. HIRAI Masao. Tokyo: Iwanami-shoten, 2014.
- Milton, John. *Paradise Lost*. New York: Oxford University Press, 2008.
- Shelley, Mary. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. A Norton Critical Edition, 2<sup>nd</sup> Edition. Ed., J. Paul Hunter. New York: W.W. Norton, 2012.
- Shelley, Mary. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. Trans. SERIZAWA Megumi. Tokyo: Shinchosha, 2015.
- Wright, Angela. *Mary Shelley*. Gothic Authors: Critical Revisions. University of Wales Press, 2018.
- 廣野由美子「批評理論入門『フランケンシュタイン』解剖講義」中公新書、2005.